

女預言者アンナの物語

ルカによる福音書2：36－38

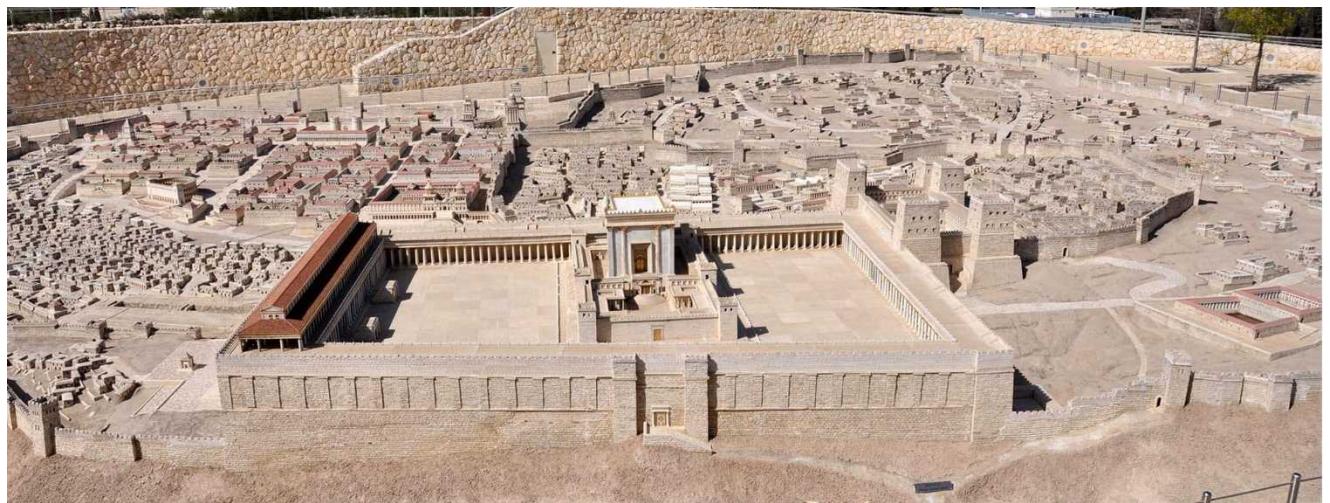
2019/02/13 井田 泉

新約聖書・ルカによる福音書第2章にはこう記されています。

「22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、『初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される』と書いてあるからである。」

「36 また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとっていて、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、37 夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、38 そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。」

イエスさまが両親によってエルサレムの神殿に連れて行かれ、神さまにささげられた日を、教会では「被献日」と呼んで記念の礼拝を行います。2月2日です。この日、神殿で幼子イエスに出会ったのはシメオンというおじいさんと、アンナというおばあさんです。今回はアンナのお話です。



ヘロデ大王の建てたエルサレム神殿

わたしはもう長年、エルサレム神殿のすぐそばに住んできました。それは、神さまからどんな時も離れたくなかったからです。もちろん、神さまはどんなところにもいらっしゃいます。神殿から遠く離れて住んでいたとしても、神さまに祈ることはできますし、神さまの憐

れみは注がれます。それでもわたしは、神殿のすぐそばに住んで、毎日神殿で祈りたかった。そうせずに生きて行けないと思ってきました。この 84 歳という年齢に至るまで、たくさんのことがありました。この日まで生かされたのはほんとうに感謝です。

わたしの父の名は「ファヌエル」といいました。「ファヌエル」とは「神の顔」という意味です。珍しい名前です。これは遠いわたしたちの先祖、ヤコブの話を思い起こさせる名前です。わたしはこの父の名前を心に刻んできましたから、その遠い昔のお話をさせてください。

わたしたちの先祖にイサクとリベカという夫婦がいました。二人には長く子どもがなく、祈って祈ってようやく与えられたのが、エサウとヤコブという双子でした。ところがあることからヤコブは兄のエサウの憎しみを買うことになりました。エサウの憤りはすさまじく、ヤコブを手に掛けて殺してしまう危険がありました。それで母リベカは、ヤコブをひとり自分の実家に預かってもらうことにしました。そこはずっと北のほう、ユーフラテス川の中流の町でハランというところです。その地方はパダン・アラムと呼ばれています。

ヤコブはリベカの兄、つまりおじさんにあたるラバンの娘と結婚し、やがてたくさんの子どもたちと僕たち、また家畜を持つようになりました。20 年をそこで過ごしたヤコブは、一家を連れて故郷に帰って来ます。ラバンとの関係が悪くなつたことと、故郷への思いが募つたのでしょう。故郷に近づき、ベツレヘムのそばまで来たとき、ヤコブの愛する妻ラケルは難産で亡くなりました。

やがて一行はヤボク川に至りました。ヤコブは先に使いを兄のエサウに出して、挨拶させました。たくさんの贈り物を用意して届けさせました。やがて使いの者が戻ってきました。エサウは 400 人のお供を連れてヤコブを迎えて来る、というのです。ヤコブはおびえました。エサウは今でも自分を憎んでいて、殺そうとしているのではないか。そう思うと、足がすくんで動けません。

けれどもここまで来た以上は引き返すわけにはいきません。エサウへの贈り物、家畜、僕たち、妻と子どもたちを先に川の向こうに渡らせました。けれども自分自身はどうしてもヤボク川を渡る勇気がありませんでした。ヤコブは必死になって祈りました。「神さま、わたしは兄のエサウが恐ろしいのです……」



ヤボク川

祈っているうちに何者かが現れてヤコブと格闘しました。その格闘は夜明けまで続きました。ヤコブはその相手を神の使いと思い、「わたしを祝福してくださるまではあなたを離しません」と訴えました。ついにみ使いはヤコブを祝福してくれました。

そのとき、ヤコブは我に返って言いました。

「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている。」創世記 32:31

み使いと思っていましたが、自分は神さまご自身を相手に格闘していたことに気づいたのです。ヤコブはその場所を「ペヌエル」と名付けました。「神の顔」という意味です。

わたしの父の名前はここから来ています。祖父母が、神と格闘するほどの経験をして、それを子ども（つまりわたしの父）の名に刻んだのでしょうか。神の顔を人は見ることはできず、それを見た者は死ぬと言われています。けれども極めて例外的に、かつての先祖ヤコブは、神の顔を見るような経験をしたのです。ヤコブの見た神の顔は、自分を罰する恐ろしい顔ではなく、自分を赦し自分を愛してくださる優しい笑顔だったのでしょう。

こうしてヤコブはヤボク川を渡り、兄と 20 年ぶりに再会しました。エサウはヤコブに走り寄って抱きしめ、口づけし、一緒に泣きました。ヤコブは兄の顔に、愛の神の顔（ペヌエル）を見たに違いありません。

「ペヌエル」は長い年月の間に変化して「ファヌエル」という言い方になりましたが、意味は同じです。父が神の顔を見るような経験をしたかどうかはわかりません。けれどもわたし自身は、神さまの顔を求め続けて生きてきたのです。

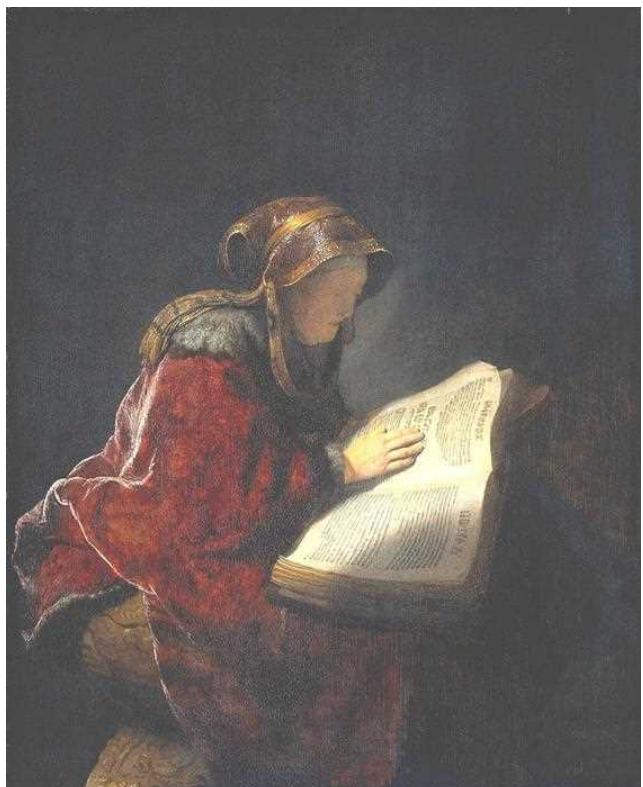
わたしは 15 歳の頃に結婚しました。しかし一緒に暮らしたのは 7 年間でした。夫は亡くなつたのです。わたしの 22 歳のときでした。夫を亡くした女がどんなに苦労しなければならないか。それからの数十年、ほんとうにつらいことの連続でした。唯一の頼りは、神さまがこのような自分の味方でいてくださる、と聖書に書かれていることです。

「『寄留者、孤児、寡婦の権利をゆがめる者は呪われる。』民は皆、『アーメン』と言わねばならない。」申命記 27:19

わたしは安息日の礼拝で朗読される聖書の言葉を心に刻み、特別に許しを得て読むことを許された聖書の巻物をむさぼるように読みました。それだけがわたしを絶望から救い、希望と力を与えてくれるものでした。聖書の言葉はわたしの力となり、命となつたのです。聖書の言葉を心に蓄えることと祈ることがわたしの生活の中心になりました。

やがてわたしは困難を抱えた人たちに、聖書の話をしてあげるようになりました。すると、それを聞いた人たちの多くは、神さまの慰めと励ましを受けるようになりました。いつの頃からかわたしは「預言者」と呼ばれるようになりました。わたしから神さまの声が聞こえる、

というのです。非常におそれ多いことです。けれどもこれは神さまがわたしに託してくださいた使命なのだと受けとめ、機会があるごとに話してきたのです。



しばらく前のある日、何か心に強く促すものを感じて、わたしは神殿に行きました。すると若い夫婦と見える二人が赤ちゃんを抱いていました。わたしは吸い寄せられるように近づいてその赤ちゃんを見ました。ファヌエル！という言葉が心に響きました。赤ちゃんの顔に、神さまの顔を見たのです。愛と平和と、正義と憐れみの神さまがここにおられる。この赤ちゃんこそ、神から来られた神の子、人となって来られた神の子。わたしたちが待望していた方だとはつきりわかりました。

わたしは、神の救いを待ち望んでいる人たちに、この赤ちゃんのことを伝えました。この赤ちゃん（イエス）が成人するころ、わたしはとうにこの世を去って神さまのもとに帰っているでしょう。けれどもなお許されるかぎりは地上において、そしてやがては神さまのもとで、この方から救いが広がっていくことをわたしは信じ、感謝して祈りつづけるでしょう。

尊い神の名を賛美します。

遠い昔の祭司アロンの祝福の祈りはわたしの祈りです。

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし
あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて
あなたに平安を賜るように。」 民数記 6:24-26